

「おてんとさま」 歌唱 島津亜矢

久仁京介

近頃は太陽のことをお日様とは呼んでも、あまりおてんとさまとは呼ばなくなりました。時代劇映画の股旅物では罪を背負った渡世人が「あっしァ日陰暮らしの半端者、明るいおてんとさまの下は、苦手でなんです」というセリフが口をついて出ます。演歌でもしかり、「日陰暮らしのひねくれ者」とか云います。

心の汚れを見抜かれてしまうような神秘さを感じてしまうのがおてんとさまでした。おてんとさまは唯一無二といえる存在、地球の100倍以上も大きく、太陽系のあらゆるものに影響を与えます。しかしおてんとさまは空から人々を見守ってくれる温かい存在とすれば、どこかほっこりします。唄ってくれる島津亜矢さんの存在感とか、唄いっぷりのようにも思えます。大らかで繊細、やさしく包み込むような癒しがあり、聴く人の琴線にふれる音色があります。そうかと思えばどこまでも突き抜けていく迫力と声量もあります。島津亜矢さんこそが、おてんとさまに負けない、いや、おてんとさまのような豊かで大きな抱擁力をお持ちなのです。作曲家は北島三郎さん、いや原譲二さんの作曲で、心が高まります。

森羅万象を司る太陽、おてんとさまは、人の生き方や考え方にも当然大きな影響を与えます。自分が信じるまま心のままに生きようとしても、思うままには歩けません。なぜなら、自分一人の世の中ではないからです。他の人と共存して周囲との距離感や気配りも必要、人との関わりがあるからです。そして自らも気付いて立ち止まることがあります。人の苦しみや状況を見て駆け寄り、手を貸すこと、心を寄せることなどは日常のことです。その逆もまた真で、心遣いを頂くこともあります。つまり気づくこと、気づかされること、その時の心に素直であれということでしょうか。ありのまま、あるがままでいいという教えがあります。人の苦しみを見たら出来ること、為せることを成すということが大事だと教えています。久仁京介は宗教家でなし、心美しい人間でもなく、よく失敗もします。間違っただけの行動も多いし、多くの過ちを経験しました。世渡りが下手な人間です。だからといって生きてはいけないという訳ではないのです。人生は一通りではなく、間違ったり、失敗したらやり直せます。やり直しの効かない失敗はほぼないのです。しかし、深刻になると、かえって立ち直れないと先人たちは云います。「人間何事も辛抱、辛抱する木に花が咲く」なんていいますが、辛抱はなかなか難しい。そこで諦めという言葉にも出会えます。諦めの心境から次へのヒントがあり、思い付きがあつて私はよく救われました。苦しい時にはふうっと息を吐き、立ち止まると意外な発見もします。気休めかも知れない、でもやってみたらいい。すると「どうして気づかなかったのか」という安堵感も生まれます。これらは久仁京介が体験し、乗り越えたものです。おてんとさまはいろんな話を紡ぎだしてくれますね。